ヤクザと詐欺師

詐欺師のスティグマ　後日談１土曜日

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18318340

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, 霊幻総受け, モ腐サイコ小説50users入り

ヤクザと元愛人パロ、後日談です。
ラブラブ甘々せっっっです。

詐欺師のスティグマ　後日談１　土曜日

「どうしてこうなった……！」

マンションに戻って、俺は玄関で靴も脱がずに頭を抱えてうずくまった。
６人とお付き合い？のみならず重婚？そんなサービス提供してませんお引き取りください！と叫びたくなる。
ここまでよく頑張った。俺は頑張ったのである。
１番痛かったのは、１枚目の爪を剥がされた時。
絶叫して失禁した俺は、服を脱がされて冷たい水をバケツでぶっかけられた。
爪を１枚剥がされただけで洗いざらいぶちまける気分になっていたのだが、いかんせん、エクボの行き先など本当に分からなかったのだ。
憑依する人間を変えられてしまえば、どんなアパートにも転がり込めてしまうし、それこそ霊体になれば普通の人間には追うこともできない。
知らない、分からないという俺に、強情だなぁとチンピラがイラついた態度で２枚目にペンチを噛ませたが、いやだやめてくれと叫ぶしかできなかった。
５枚も剥がされれば、もはや正気ではいられなかった。
小も大も漏らしたし、適当なホテルの名前を言ったり、チンピラをセックスに誘ったりと支離滅裂な行動を繰り返した。
そこでふと、エクボに言われていた「はぐれた場合」の待ち合わせ場所を思い出したが、そこにチンピラを向かわせたら、エクボが何をするか分からなかったので、言わなかった。
なにしろ恋人は悪霊なのだ。俺を拷問、強姦して情報を聞き出してきたチンピラがのこのこやってくれば、ヤクザよりもえげつないことをする可能性があった。
半ば発狂しかかっても、愛するエクボに悪いことをさせたくないと冷静に考える頭は残ってるなんて、意外と自分はタフだなとへらっ

と笑ったのを覚えている。
発狂してしまえば、あとは楽だった。爪を剥がされる痛みも慣れたもの、適当なことをくっちゃべりながら、注射を待つみたいにペンチを待つ。その内本当に自白剤の注射も打たれて、頭がふわふわしてきた。
「お前何ものだよ……」
発狂して適当に舌を滑らせているだけなのに、その内容に翻弄されるチンピラが可笑しかった。
そう言えば「おまえはいい奴だな」とか「おいで、優しく抱かれてやる」とか無意識にオトそうとしたような気もする。
黙り込んだチンピラがベルトを外そうとしてるのを見て、そんなにチョロくて大丈夫か？と他人事ながら心配になったのを覚えている。あとからモブに「いや、師匠の手練手管が凄すぎただけです」とか言われたけど、信じてない。そんなわけあるか。百戦錬磨の娼婦じゃあるまいし。
もう大分自暴自棄になっていたが、めちゃくちゃな利息をふっかけてきたヤクザに一泡ふかせたいとはぼんやり思っていた。
セックスしようとすれば、縄を外さなくてはいけない。
手足が傷付けられていてすぐ逃げたりはできないが、なんとかこのチンピラを殴って気絶させられれば、意趣返しぐらいはできるかもしれない──と、ラリった頭で考えていた時。
モブが現れた。
その時俺は、全てを悟った気がした。

ああこれは、罰なのだ、と。

５年前。
エクボと2人きりになった相談所で、俺はぽつりぽつりと、モブたちの「足枷」になりそうな自分が怖い、と不安を漏らしていた。
エクボは俺が弱っているのを敏感に察してか、黙ってきいてくれていた。
それにこんなことを言うのは傲慢かもしれないけれど、俺自身がどこかモブたちのことを、呪縛のように感じてもいたのだ。

ただの他人なのに、付き合いが長すぎて。
例えば自分の誕生日だって、さりげなくモブたちのためにあけておかなくちゃいけない。それが嫌では無かったが、本来そんなに濃い人付き合いをしないタイプだった俺は、だんだんめんどくさくてつらいと思い始めていた。
こんな気持ちでモブや芹沢と居ることに、罪悪感をおぼえていたが、別れればすむ恋人と違って、モブたちとの関係は、どうやったら距離を取れるのか、俺には分からなかった。
そんな時に芹沢が就職し、モブが忙しくなった。
適度に突き放してくれるエクボと2人きりになって、俺は解放感にほっとしてしまった。
このまま相談所を畳んで、消えてしまいたい。
エクボが「いいんじゃねーか？」と同意してくれたその動機は、基本的には俺のわがままだった。
「でも、できないよな……モブたちも納得しないだろうし、追いかけられたらすぐ捕まるだろうし」
「あいつらはお前に甘え過ぎなんだよ。ちったぁ冷水浴びせかけてやりゃあいい。自分達は手伝いもしないくせに、相談所には昔のままの避難所であって欲しいなんて、ムシが良すぎるんだ。なんなら俺様が逃げるの手伝ってやる。一年ぐらいは確実に逃げさせてやれるぜ」
「なんで、そこまで」
いつもは適度な距離にいるエクボが、失踪の相談で突然距離を縮めてきた。それが不思議だった。
「俺様は、おまえが好きだってことをちゃんと理解っているからだ」
「え」
突然の愛の告白に固まる。
どうしよう。俺、考えたこと無くて──。
「あー凄い顔してんぞ霊幻。今無理に返事しなくていい。俺ぁあいつらにイライラしてんだよ。自分の気持ちは傷付かないように気付かないふりして、おまえからの愛情だけむさぼってるあいつらにな。……おまえが疲れて当然だよ。あんな感情を向けられ続けて、

しかも都合の良い時だけ見返りを要求され続けて。……俺だったらキレてる」
「エクボ……？どういうことだ？」
「……気付いてないならそのままでいい。その方が俺様にゃあ都合がいいからな」
その言い草は、まるでモブや芹沢がその当時から、いやそれ以前から俺に気があるようないい方だった。勘弁してくれ、それはないだろうと俺は苦笑した。男にばっかりモテてたまるか。
「ともかく。この２カ月が勝負だぞ。シゲオに勘付かれたら終わりだ。俺は消滅、お前は洗脳監禁コースだ」
「なに言ってんの！？モブがそんなことするわけないだろ！」
今思えば似たようなことはされたので、このエクボの読みは当たっていたのかもしれない。
「ともかく、いそげ」
「……エクボは本当にいいのか？その、モブと離れても……」
「……最近では別行動の方が多いさ。大人になって、俺がそばにいるのをうっとおしがるようにもなってきたしな。それに言ったろ。俺様ちょっと、シゲオにも怒ってる」
「そうか……エクボも寂しいんだな」
「オイ。そういう話じゃ無かっただろーが」
「……そうか。俺、寂しいんだな」
エクボと2人きりになった相談所を改めて見回す。
がらん、とした部屋に、中途半端にもう戻ってこない愛着が散らばっているのを、初めて認識した。
「……俺、あいつらとお別れがしたいんだと思う。弟子離れしたい……いや、しなくちゃいけないんだ。これからの人生のために」
「……おう」
「エクボ、付き合ってくれ」
「最初からいいって言ってるだろーが。ふはっ、面白くなってきやがったぜ」
「は？」
「おまえさんを失ったシゲオを想像するだけで俺ぁ楽しくなってくるのさ。恋敵だからな……まぁそんなことはいい。いいか、逃げて

いる間は俺様の言う事は絶対にきけよ。霊力と元信者を駆使して痕跡を消す。お前が勝手な行動をすりゃあ俺様の苦労が水の泡だ」
「分かった。そうと決まれば……」
やることが決まっているのなら、あとは楽だった。新規の客を断り、しばらく休業する、と常連に連絡し。顧客情報を処分し、室内の物品をリサイクルセンターに引き取ってもらう。あとはテナントを解約すれば終わりだ。
「あ、そうだ霊幻。おまえクレジットカードとか銀行口座とか一旦全部解約しろよ。探偵とか雇われるとそこから見つかったりするから。金の心配ならいらねぇ。俺が教祖の時に分散して溜めてたところからなんとかするから」
「用心深いんだな、おまえ……分かったよ。言う通りにする」
事務所を片付けて。すっからかんになった部屋やアパートに、窓から夕暮れの風を通して。
俺は新しい世界に、年甲斐もなくわくわくしていた。
──卒業。
俺は今日、霊とか相談所を卒業する。
旅立つにはちょうどいい、清々しい夜だった。

……そんな感じで。
５年前、協力者を得たのをこれ幸いと、おれは清々しいほど無責任に、「モブたちなら大丈夫だろ」という根拠のない思い込みとともに、弟子たちを放っぽり出したのである。
正直に言おう。
俺のクズなところが出たのだ。

そんな俺でも、たまにはモブたちのことが気にはなっていた。
それでもそのたびに「あいつらなら大丈夫、あいつらならやっていける」と都合の良いように自分に言い聞かせて。

そのむくいが、目の前に立っている、死んだ目をしたモブだと思った。

モブを見た瞬間、冷水をかけられてもいないのに、アタマがざぁっと冷たくなった。
モブ。俺のかわいいモブ。背が高くなったな、からだも逞しくなった。
ああ、それなのに──暴力の象徴の高級スーツを着こなして、鉄板の入ったヒトを蹴るための靴を履いて、そんなに辛そうな……悲しそうな目を、しているなんて。
その姿を見て、一気に俺の中で『霊とか相談所に居た頃の俺』が蘇った。
導かねばならない。叱らなければならない。……モブが、罪人の俺に、それを課している、と。
まずは目の前で他人に超能力を向けようとしているのを止めなければ、とクスリで回らない舌に必死に力を入れて、弟子に声をかけた。

──止まって、くれた。

良かった、まだモブの師匠でいれた、と心底ホッとした。

そしてモブの話をきいて、俺は償いをしようと思った。
もはや手遅れになってしまった彼らの人生を取り戻すことはできなくとも。
彼らの「霊とか相談所ごっこ」に付き合って、少しでも彼らが安らかに過ごせるように。

そして祈った。

こんな情緒不安定な規格外の超能力者が勢揃いしているところに、万が一にもエクボが乗り込んできませんように、と。
俺のわがままに付き合ってくれた、優しい悪霊が、傷付けられることが、ありませんように、と。

ただ、その祈りは打ち砕かれ。

俺は色々頑張り、なんやかやあって俺は６人の能力者と重婚し、霊とか相談所を再開することになった。

……いやそのなんやかやが謎すぎるだろう！もう一度言おう！
「どうしてこうなった……！」

がちゃ。

「ただいま〜……って、うおっ！なんでそんな所にいやがる！！蹴るところだっただろうが！！」

※※※※※

霊幻と立ち上げた「ベンチャーとか相談所やは、めちゃくちゃ儲かっていた。あくどい商売をしていたわけじゃない。霊幻が本来の天職である「カウンセラー」として働くので、それ相応の代金を設定しただけだ。そしたら、めちゃくちゃ儲かった。それだけの話だった。
ベンチャーを立ち上げたものの今ひとつ上手くいかない。そんな時に欲しいのは実はアドバイスではなくて寄り添ってくれる存在だったりする。そんな若者に寄り添うのが、霊幻は抜群に上手かった。次々と信者に近くなる若者たち。
危険だなと思った俺様は、次第に人を雇って霊幻の代わりにカウンセリングさせ、霊幻がサービスでやっていたマッサージも外部の会社に委託した。
ほんとうに、こいつは働かせるとすぐ若者をたぶらかす……まぁ若者だけじゃないが。
ともかく軌道にのっていた「ベンチャーとか相談所」で儲けた金をさらに投資で増やし、俺と霊幻の懐はだいぶ暖まっていた。
ので、調味市に戻ってはきたが、霊幻のアパートには戻らず、今俺たちはちょっといいマンションを借りて住んでいる。広いリビングでゆっくりテレビが見れて、筋トレ部屋と寝室を分けられる広さのマンションだ。当然、バストイレ別。

２人暮らしなんかすれば、ある程度の広さはないとお互いストレスが溜まる。
特に、1人の時間も大事な霊幻には、「広さ」は重要だった。
「早くスーツ脱いで風呂の準備しろよ。また入るのがめんどくさくなるぞ」
うぐぅ、と唸りながら霊幻が立ち上がって風呂場に消えていく。
「……コーヒー淹れといてやるからよ」
そう言うと、うん、と安心したような、嬉しそうな声が帰ってきた。

これから先、俺がコーヒーを豆から淹れてやるのは、霊幻新隆、永遠にお前にだけだ。

こいつは小っ恥ずかしい俺様の口説き文句だ。
月並みな愛の言葉じゃ、まったく俺様の愛情を信じなかった自分嫌いに、やっと届いた一言だった。
こいつは俺様の粘り勝ちだ。
失踪して一年間、ずっと霊幻を観察して。
愛を囁き続けて甘やかして面倒ごとを引き受けてやって。
それでやっと、聞き出した本音。

コーヒーが好きなんだけど、めんどくさいから豆から淹れたりはしない。

その一言にすかさずさっきのように返し、慣れないコーヒーを淹れてやった。あいつはたいそう喜んで──そして、やっと俺の愛を受け入れた。
そこから４年かけて恋人としての地位を確実にしていった。今のあいつが俺の愛を疑わないのは、ひとえに俺の努力のたまものである。
「エクボぉ」
コーヒーの準備をしていると、後ろから霊幻が抱きついてくる。
シャツにシャツガーター、ボクサーパンツ、そしてソックスにソッ

クスガーターという「誘ってんのか？」というような格好だが、ここでガッツいてはいけない。すぐこいつは「身体目当てなのか」と誤解するからだ。それに、今はコーヒーを淹れている。これには特別な意味を込めてあるので、中断するわけにはいかなかったし、霊幻もそれを望んではいないだろう。
「んん？どうした」
「ごめんなぁ、こんなことになって……俺、どうしたらいいか分からなくて」
「こんなこと、って？」
「重婚のこと……」
こいつとは誤解のないように話すのが大事だ。お互い察しがいい方なせいで、言葉をはしょり過ぎてすれ違ったことは一度や二度では無い。だから俺様はいちいち聞き返すようにしていた。
「まぁ、俺様が想定していたより最悪じゃないさ。……というより、本当にこの程度でおさまって良かったと思ってる。そうそう、お前さんの言う通りに言いくるめてきたぜ」
「でも……そもそも俺が失踪なんてしなけりゃ……」
「それは違うぞ霊幻。あそこで逃げなきゃもっと酷いことになってたかもしれん」
５年前。
モブや芹沢の「甘え方」は度を越していた。
霊幻が身内に甘いのをいいことに、ベタベタすりすりと腰を抱いたり肩を抱いたり、髪に鼻を埋めたり唇に触れたり、やりたい放題だった。たまに相談所にたずねてくる律やテル、ショウなんかも霊幻が抵抗しないし怒らないのを見て、徐々に手を出すようになってきていた。
こいつら、とエクボは都合の良い時だけ霊幻に性的に甘えるモブたちに、怒りを感じていた。
日頃は身近な女性だのなんだので自分は自由に遊んでおきながら、霊幻は相談所に縛り付けておいて、寂しい時とか甘えたい時だけ触りにくる。
霊幻はセクハラしていい都合の良いママじゃねーぞ、ととっくの昔に恋心を自覚していた俺様は、シゲオたちにいらついていた。

あれだけ触られまくれば、ストレスが溜まって当然だ。しかもそこに性的な意味合いまで含まれていたらなおさらだ。霊幻がその環境から逃げ出したくなったのは当然だし、俺様から見れば遅すぎたぐらいだ。
これでもし、霊幻があのまま相談所を続けていたら。
最悪、シゲオたちは霊幻を『飼う』という選択肢を選んでいたかもしれない。
いわゆる無料の私娼だ。
霊幻を何処かのアパートにでも軟禁して、好きな時に好きなやつが抱きにくる。それぞれ彼女だの家庭だのを好きに持ちながら……。
そんな霊幻の人権マル無視の状態も、あれだけの実力者に揃われると、実現できてしまうのが厄介だった。俺様は焦っていたが、俺の実力ではどうにもならないことは分かっていた。
──いっそ俺様が腹決めて押しに弱い霊幻と付き合い出せば、『好きな時につまみ食いできるクッキー』みたいな霊幻の状態は、解消できるか──？場合によっちゃ痴情のもつれで比喩でなく戦争が起きるが──。
そう思い始めた矢先だった。霊幻が「失踪したい」と言い出したのは。俺様は心底ほっとした。本人が逃げたがってるならなんとかなる。恋愛の甘いところだけつまみ食いしようとしている連中からはトンズラだ。
「あのままずるずる相談所を続けてたら、お前さんシゲオたちに食い散らかされて傷だらけになってたぞ」
「馬鹿言え。モブがそんなことするかよ」
してたんだよ。軽くだけど、実際に。
俺様はそうは言えずに黙る。昔のかわいかったモブの思い出は、霊幻の心の柔らかいところに仕舞われている。そこをあまり刺激すると、喧嘩になるのでやめておいた。
とかく霊幻は身内に甘い。ねだられれば身体を許すぐらいには。そんな所につけこまれて私娼にされるのを回避できたのは、我ながら上出来だと思った。
──告白もせずにセックスだけしたいだなんて、甘ぇんだよ。
そんなわがままボーイたちからは、大事なママを取り上げてやった

だけのことだ。ちちばなれしろ。
「とにかく、あいつらがしっかりお前と対等にパートナーになってるんなら俺は何も言うことねーよ。昔に比べりゃ万々歳だ」
「……お前ってそういうところ心が広いのな。普通いやだろ、恋人がそれだけ浮気してたら……」
……。いやその。実は最初からこんな状態だったんだが。
こいつは押しに弱いし、慕ってくれる全員にうっすら好意を抱いていた。
単に順番の問題なのだ。誰かが告白して霊幻を独占しようとしたら、なし崩しに似たような重婚状態になっていた可能性が高い。
それか。
全員に悪いから、と霊幻が全員フれば、俺まで敵に回して、全員で霊幻を監禁するルートになってたか、だ。
「……なんだかんだで、俺様はお前を独占してた３年間がある。俺はその時間を大事にしてるんだぜ」
「……これからも、土曜日はお前が独占するんだろ」
ぎゅっと抱きつく力を強めて背中に顔をうずめてくる。
あーかわいい。でも我慢だ。
「そーだな。でもシゲオを誘って3Pぐらいはそのうちしてみようぜ？」
「おっまえな……まだ言うか？」
顔を赤くした霊幻がじとりと俺様を睨んでくる。
長く存在してきた俺様には、普通の性交は飽き飽きなのは本当だ。
だが、こう言うことで、『不測の事態』での霊幻を守る準備をしていたのも事実だ。
失踪している間、俺様はいつかシゲオたちに見つかる覚悟をしていた。
いくら目くらましをしても、生きてる以上は痕跡が残る。いずれは見つかるだろうと考えていた。
そこで捕まえた霊幻が、俺とセックスをしていると知ったら……強姦する可能性はそんなに低くないだろう。なにせ何をしても師匠は許してくれる、と甘えきっているシゲオたちのことだから。
そんな時。

俺への操立てで霊幻が拒否したり暴れたりしたら、霊幻の安全が保証できなくなってしまう。
お前が誰に抱かれようと俺の愛情が揺らぐことはない。
これは霊幻を守るために、何度も軽口をたたいて築き上げてきた信頼だ。
「……ま、気にすんなよ。今まで通り俺様はお前が好きで、お前は俺様が好き。それでいいだろ。ほら、コーヒー出来たぞ」
「……ありがと」
「熱いから冷たい牛乳入れるか？」
「ん……このままでいい」
絆創膏をデカいネイルのように両手にまとったまま。
マグカップを器用に持って、ちび、ちび、と愛情が冷めぬうちに、とすすっているようだった。
──おまえさんが冷めたと思ったら、またアツアツを入れてやるよ。
俺は霊幻がコーヒーをうまそうにするのを見ながら、霊幻のコーヒーを飲む補助をしていた。

※※※※※

「……なぁエクボ、今日、やりたい」
ぺりぺり。風呂に入るために足のガーゼをゆっくり剥がしていると、ぽつりと霊幻が言った。
「あ？何をだ」
分かってて聞き返す。
「せっ……くす……」
恥ずかしそうに爪の無い手で口元を隠しながら霊幻が言う。
かーったまんねぇなオイ！！
「昨日の今日だろ。大丈夫か？」
「……乱暴にされたから、優しくされたいんだよ。な、抱いてくれ……」
おい、モブども。
恋人だの結婚だの肩書きだけ手に入れて安心してるおまえらには、この境地にはそうそう到達できねーからな、覚悟しておけよ。

この愛多き男は、自分をそう簡単には愛させない。
「いいぜぇ？風呂で準備してくか。……その手じゃ無理だろ。俺が手伝うのでいいな？」
「ああ」
手や足がこんなになってなくても、霊幻の支度を手伝うのはプレイの一貫でままある。
──霊幻の、手足。
霊幻にはナイショだが、霊幻を拷問したらしいチンピラを俺様は『お礼』するために探し出していた。
……が。すでにチンピラはシゲオたちにたっぷり『お礼』されたあとで、俺が指でつまむスキマも無かった。
そのことをシゲオに、いいのかよ、人に向けて使って、と言ったら、超能力は使ってない、素手でやったとさらっと返してきた。……ホントにいい性格に育ったものである。全くそこは計算外だった。まさかヤクザにまでなるとは……。

あいつらが霊幻に言っていないことがある。
親の治療費なんかを理由にヤクザに協力するようになったのは半分だ。もう半分の理由は、霊幻そのものである。最初は自分達で探していたが、限界を感じたシゲオたちは探偵に頼った。だがそれでも見つからなかった彼らに、興信所の人間がポロっともらしたのである。『もはやヤクザおかかえの情報屋ぐらいじゃないと探せない』と。それを聞いていたシゲオは、霊幻に幻滅されるかもしれない、と思いながらも、ヤクザの手を取ったのだ。
……大した執念である。これで無自覚だったのだからもはや凄いとしか言いようがない。

しかし、不思議な運命だ。結局俺様の撹乱はヤクザの情報屋までごまかせていたのだが、運悪く痴話喧嘩をしていた時に霊幻はよりにもよってシゲオが所属してるヤクザに捕まってしまった。
当然すぐ助けに行ったのだが、超能力者の気配に警戒して霊幻を奪還できなかった。その間に、霊幻とシゲオは再会してしまった……。

それにしても。
あらかじめ罠として霊幻に伝えていた待ち合わせ場所に誰も来なかったのには、俺様愛されてんなぁとほくそ笑んでしまう。
長年呪いを込めた即死部屋だ。たとえシゲオでも無傷ではすまない。──それをうすうす予想していたから霊幻は言わなかったのだろう。あいつは俺に殺人や人を傷付けることをやらせたがらない。悪霊の持ち腐れだぜ、もったいない。
「ェ、エクボっ！も、いい……っ」
おっと。考え事をしながら霊幻の尻をいじりすぎた。目の前にはすっかり出来上がった霊幻がいた。

風呂から上がって、指に軟膏と絆創膏、足に軟膏、ガーゼ、包帯を巻いてやる。
「……ありがと」
「いいってことよ」
実は、霊幻はもうこのあたりの手当ては自分でできるようになっている。すさまじい適応力と精神力だ。
だが、分かってて俺様に甘えてくるし、俺様も甘やかしてやってやる。
このへんは俺様の特権だ。
「そう言えばその身体、借りてて大丈夫なのか？」
「久しぶりに会いに行ったら、『しばらく眠っていたい』って明け渡してくれたから、大丈夫だろ」
「……その男の精神状態がちょっと心配になるな」
５年も経てば生きてる人間なら色々ある。そっとしておいてやるのも優しさだ。
「この男のチンポを味わうのは初めてだろ？色々期待しとけ」
「……ばか」
これまでも色んな人間に憑依して霊幻を抱いてきた。
そのたびに違う反応を返してくるのが、長い悪霊人生のちょっとした楽しみになっていた。
同意の上での憑依先は俺様の手足だ。手足が多い方が便利なのは当然、だろうか。

ひたひたとゆっくりベッドに向かいはじめた霊幻を抱き上げて運ぶ。
弟子たちの手前「もう平気ですよ」とスタスタ歩いて見せているが、痛むものは痛むのである。
俺様といる時は気を抜いて、慎重に動いていた。
「わ、早ぇ」
抱き上げられて無邪気に笑う霊幻に、もぅちっと色気出せ、と呆れた声を落とした。
「えくぼ」
それに応えるかのように、ベッドに下ろされた霊幻は赤い舌をちろりと見せながら両手を広げて俺を誘う。「どうぞ食べて」のポーズだ。
久々の霊幻に俺もたまらず、上からかぶさって唇を奪った。
霊幻の腕が俺を抱きしめてくる。
多幸感にじんわりと頭が痺れてきた。
「んぁ……ふ、っ、ん……じょ、うず……」
「誰と比べてやがるんだよ」
「ん……？別の身体……。流石にセックスまですると、身体の……舌の形とかで……クセが出るぞ……」
「……ちょっと待てお前、まだシゲオたちとはキスしたことないのか？」
「そう言えば……ない……ん、！」
心の柔らかいところを刺激されて、チープな独占欲に支配される。
柔らかで暖かい霊幻の舌をしゃぶりつくし、唾液をすする。
「ぁ……」
詐欺師のよく回る口を塞ぐのがこんなに気持ちいいなんて、まだあいつら知らないのか。もったいねーことしてんなぁ。
キスしながら乳首に触れると、びくんと霊幻の身体がはねた。
「？どうした、ココに酷いことされたのか？」
「ちがっ……律が、しつこく触ってきて……」
「ふはっ！開発されちまったのか！そいつはいいことを聞いた」
「ぁっ、ちょ、っと、おい……っ！」
すりすり、くにくに。擦ったりすりつぶしたりするたびに霊幻の腰

が跳ねる。前はここまでモロ感では無かった。
当然チリっとした嫉妬は走るが、新しい顔を俺に見せてくれたことに、悦びがわく。
「他に何されたんだよ」
「……電極を挿されて、前立腺に電流ながされた……」
「えっ」
……それは、ただの拷問だな……と思ったが、顔を赤らめているところを見ると……。
「気持ち良すぎて失神した……」
「まじかよ……」
っかーっ、開発されてきてんな〜！！
俺様見たかった！！
しかしこれだけのことをされていても『気持ちよかった』で済ましているのは、ひとえにこいつがめちゃくちゃあいつらのことを元々大事にしている上に、心の底から信頼しているからだ。
久しぶりにその信頼をむさぼるのは、さぞかし気持ちよかったろうなぁ、と5年前と同じ怒りがふつふつとわいてくる。
まぁいい。クソガキどもが霊幻を食い荒らして甘えてるうちに、俺様は真逆のことをして霊幻の心を掴むのみだ。
「〜〜っ、いつまで乳首いじってんだよ！！……も、せつない……」
「お、悪い」
見ると霊幻の性器がだらだらと先走りを垂らしていた。
「どっちが良い？前か後ろか」
「ん……早く繋がりたい。後ろほぐしてくれよ」
っかー、素直なこいつの破壊力半端ねぇな！？
甘やかせば甘やかすほど可愛くなっていきやがる。ほんとしゃぶりがいのある嫁だぜ。
指にコンドームをかぶせて、アナル用のローションをたっぷりかけてぬぐぬぐとまず入り口をほぐす。
何度もローションを足しながら、ゆっくりと指を埋める深さを増していく。
「痛くねぇか？」

「……もどかし……」
「我慢しろ、欲しがりめ」
「……そんなじゃ……」
たまには耳元で言葉責めも。とにかく霊幻が欲しがるものは全部与えてやる。
「ん？えらく吸い付くようになってんな。括約筋トレーニングでもさせられたか？」
「……は、ぁっ……電流流された、せいじゃね？」
体がびっくりしてちょっと体質が変わったのかもしれない。
……これは逆トコロテンしないように気ぃ張ってないと、童貞よろしく入れた瞬間出しちまうな……。
中でゆっくりと指を回す。
次第に緊張していた中がほぐれてきたので、指を増やしていった。
「ぁっ、……ぅ、えくぼ、そこ……」
「ナカイキするとしんどくなるだろ？あとだ、あと」
──あとで、コイツでたっぷりついてやんよ。
耳元でささやきながら俺様の性器を触らせてやると、霊幻は期待にごくりと喉を鳴らした。
指が３本、抵抗なく抽挿できるようになった。
ずっちゅずっちゅと卑猥な音が響く。
……頃合いだな。
俺様はコンドームをつけて、ひたりと入り口に先端を当てた。
「……いいか？」
「も、ほんと、いいから入れろよ……！」
焦らしすぎて霊幻の目にうっすら涙が浮かんできている。気持ちいい涙だ。
俺様はそれを吸い取るように目元に口付けてから、ゆっくりと腰をすすめた。
「ぁあ……ッ」
安堵したような、たまらないような吐息を霊幻が漏らす。
たまらないのはこっちだよチクショウ。ナカがうねって絡みついてきて、すぐ持っていかれそうだ……っ。
「霊幻お前……名器っぷりを上げてきたな……」

「ぁっ、ぅ、……？ふふん……」
よく分かってないくせに偉そうにするの、可愛い。
根元まで入れたら、しばらくじっとして霊幻が太さに馴染むのを待つ。
いま借りてる体のペニスはデカい。ほぐしたとしてもしばらくは内部を圧迫する。
霊幻の違和感が徐々にとれて。
一旦落ち着いてきたころ。
「ぁ……？」
柔らかくなった内部が、俺様の性器にごりごりと削られるようになってきた。
「なんか……これ、凄い、んだが……ぁ、」
「だろ？楽しめよ、霊幻」
カリが前立腺をこすって結腸をノックする。
太い根本や睾丸が入り口を刺激する。
「やっ、ぁ、あぁっ、ぅっ、んっ、」
ずりゅずりゅと粘膜が弄ばれる音が耳を刺激した。
「えくぼっ、イク、イクから……」
ぐいっと霊幻が俺様を抱き寄せて、耳元に唇を付ける。
……しきゅうブチ抜いて？
昔に俺様が教えた睦言を囁かれてアタマが一瞬で沸騰した。
今までの優しい抽挿はなりをひそめ、乱暴にガツガツと霊幻を犯す。
「あ！あ、えくぼ、イイ……っ」
とろけた顔で魔性の男が喘いでいる。
たまらない。
ぬぽっ、と先端が、結腸をブチ抜いた。
「ぁ、あ……ッ！」
少しだけ霊幻の性器が白濁をこぼし、ぎゅううと霊幻は全身で俺様を味わった。

※※※※※

「はー、すっきりした」
「情緒もへったくれもねぇな」
「いいじゃん。俺とお前の仲だろ」
また淹れてやったコーヒーを差し出しながら、けだるげな霊幻に軽口をたたく。２杯目は胃に来ないよう問答無用でカフェオレだ。
「……まぁ、どうせ重婚状態なんて、長くは続かないよな」
「あ？」
何を考えてるのかと思えば、またこいつはそういう楽観的なネガティブなことを……。
「あいつらはまだ若いし……俺とのセックスに飽きたら、別れるって言い出すだろ」
「っかー！ほんとお前さんはあいつらのことになると読みを外すな！？それ、シゲオ達の愛情ガン無視の計算じゃねぇか」
「愛情？」
マグカップからきょとんとした顔で霊幻が目線をこっちに寄越す。
「あいつらが俺に愛情なんてあるわけないだろう」
馬鹿だな、と何でも無いように霊幻は笑う。

「あんなことをしておいて」

……ザマアミロ、と俺様は高笑いしそうになった。

続